

## 雪の上の足跡

堀辰雄

【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ

（例） 獣<sup>けだもの</sup>

ー：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例） 茶屋<sup>はたし</sup>ー旅籠

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数）

（例） 「#「足へん+宛」、第3水準1-92-36」

高原の古駅における、二月の夕方の対話

主 やあ、どこへ行ったかと思ったら、雪だらけになって帰って来たね。

学生 林の中を歩いて来ました。雑木林の中なぞは随分雪が深いのですね。どうかすると、腰のあたりまで雪の中に埋まってしまいます。獣<sup>けだもの</sup>の足跡が一めんについているので、そんな上なら大丈夫か

とおもって、足を踏みこむと、その下が藪やぶになっていたりして、飛んだ目に逢あったりしました。

主 君と、兎なんぞが一しよになるものかね。それに、もういくぶん春めいて来ているから、凍雪しみゆきもゆるんで来ているのだろう。だが、そうやって雪の中が歩けてきたら、さぞ好い気もちだろうなあ。

学生 ええ、実に愉快でした。歩きながら、立原道造さんの詩にも、こうやって林の中をひとりで歩きながら、深い雪の底に夏の日に咲いていた花がそのまま隠れているような気がしたり、蝶の飛んでいる幻を見たりするような詩があったのを思い出しました。

主 立原は、僕がはじめてここで冬を越したとき、二月になってからやって来た。あいにく僕が病気で寝こんでいたので、君のように、ひとりで林の中を雪だらけになって歩いて帰って来たっけ。そのときの詩だろう。もう七八年前になるかなあ。……どうだい、狐のやつの足跡はついていなかったかい？

学生 狐の足跡はどうも分かりませんでした。どんなんだか、まだそれもよくは……。

主 そうだな、こう、まっすぐに、一本の点線を雪おきての面にすうつと描いたような具合に、林のへりなぞをよく縫い歩いているのだがね。兎のやつのは、そこいら中を無茶苦茶に跳びまわると見え、足跡も一めんに入りみだれているが、狐のやつのは、いつもこう一すじにすうつとついている。そしてそのまま林の奥にほそぼそと消えていたり、どうかすると思いがけず農家の背戸せとのあたりまで近づいて来ていたりする。

学生 狐なぞがまだこのへんにうるついているのでしょうかしら？

主 いるらしい。このごろは冬になると、僕はからきし意気地いっきじがなくなつて、ちつとも雪の中を歩かないが、二三年前にはそんな足跡をいくつも見たことがある。しかし、いたつて、もうたかの知れたもんだ。せいぜい農家の鶏を盗りにくる位なものだろう。

学生 いつだかお書きになっていた、昔、武家に切り殺された、この宿の遊女の墓しほに夜ごとに訪れてくる老狐の話　なんでもその墓にひとりでに縛ひびが入つて、ちよつど刀傷のように痛いたしく見えた、その傷のあたりをその狐が舐なめて「#「舐なめて」は底本では「舐なめて」「やつていたとかいう話でしたね。　あれはこの村の話なのですか？

主 この村ではないが、隣りの村の古老にきいた話だ。ハアンでも好んで書きそうな話だ。ああいう話が残っていたら、もつと聞きたいものだが、あまり無いようだね。どうもこういう古駅には一たいに昔話などが少ないのではないかね。維新前までは茶屋一旅籠はたしがたてこみ、脇本陣だけでも遊女が百人からいたという、名高い宿しほのあとだもの。その日その日にちがった話を諸国の旅びとから聞くのに追われて、山奥なぞのつれづれな炉ばたで人にときどきふと思ひ出されては漸ようやく忘却から蘇よみがえらされて来たような、そういう昔話の残っていないのも当然だろうじゃあないか。

学生 そうかも知れませぬ。しかし、まだ二つや三つはそんな話もありそうな気がしますね。

主 そう、ありそうな気もする。ところが、ありそうで無いんだ。なんにも無いくせに、そんな雰囲気だけはもっている　そこがまあ現在のこの村の一種の持味で、僕なんぞにはかえつてびつたりし

ているのだらうと思う。こんなに荒廃して、それがそれなりになんとなく錆びて落ち着いてきている、そんなところからそういう一種の味が出ているのだらうね。だから、つまらないことまで、妙に生き生きとして感ぜられて来ることもある。僕がはじめてこの村に来た当時のことだが、或日、昔の屋敷跡らしい大きな石崖のうえに立って、秋らしい日ざしを浴びながら、病みあがりらしくほんやり藪科山の方をながめていた。その晩、宿の主人がいうのに、そのときそうやって石崖のうえに立っていた僕の姿を遠くから見かけて、ふと子供のときに見た一匹の傷ついた鹿のことを思い出したそうだ。なんでも霜のひどく下りた朝のことで、山のほうから追われて来らしいその鹿は、丁度その石崖のところまで来ると、ちよいと背後をふりむいてから、其処をすうっと跳びおりて、下の畠のなかを湯川のほうへ一散に逃げていった。そうしてその畠の真白な霜の上には、その鹿の傷ついた足の血が鮮やかに残っていたという話だ。……そんなことをきいてから、その石崖にかぎらず、この村のあちこちに残っている石崖のひとつひとつが、僕にはなんとなく意味ありげに思われて来てならなかった。まあ、そういう鹿の跳び越えていった石垣だとか、秋になると薦かずらが真紅になったまま捲きついている、何か悽惨な感じの、遊女らしい小さな墓だとか、そういうものなら、そのほかに、まだまだ何かありそうだね、これという話らしい話がそれに伴っていなくとも。

学生 三好さんの詩にも、何処かの山村を、一匹の傷ついた鹿が足を縛られたまま、獵師にかつがれてゆく詩がありますね。あれは何処かしら？

主 伊豆の湯ヶ島あたりの風景だらう。僕は残念だが、とうとう

鹿は見られなかった。向うの小瀬あたりでも、一昔前までは、よく鹿の啼きこえが聞えたそうだ。

学生 僕はこの間、チエホフの「学生」という短篇をよみました。復活祭で帰省していた一人の学生が、或日 北風の吹いている、寒い日でしたが、なんだか此の世にはいつの時代にもこんな風が吹きまくっていて、そこには無智と悲惨としか見られないような考えを抱いて、非常にうち沈んだ気もちになって、散歩から帰って来ると、もう暮れがたで、隣り村の或農家の中庭では焚火たきびをしている。

みると、それは昔自分の乳母だった寡婦と、その不しあわせな娘なので、学生はしばらくその焚火にあたらしてもらっているうち、急に使徒のペテロも丁度こんな風に焚火にあたっていたんだろう、と思ひ出し、それからペテロが鶏の啼くまえに三たびクリストをいな否んだ物語をその二人の女に向って話しはじめる。女たちは黙って聞いていたが、そのうち急に二人とも泣き出してしまふ。学生はそこを立ち去りながら、なぜ彼女たちは泣いたのだろうかと考える。別に自分がその話を感動的に話したからではない。それはきっとその話のペテロに起った出来事が、彼女たちにも、又、自分にもいくらか関係しているからなんだろう。とおもつと、そんな昔から今日まで、断絶せずに続いている一つの鎖が見えるような気がしている。自分がその一方の端に触れたので、もう一方の端が揺れたのだ。真理と美とがあの大司祭の庭のなかで人びとを導いた、そうしていまもおそれが我々を導いている。そう考えると、学生には急に自分に青春と幸福の感じが帰ってきて、人生が何か崇高な意味に充ちみちているように思われて来る。そういつた筋の、五六頁ばかりの短篇なのです。しかし、僕はそれを読んで、なんだかその学生と一し

よになって泣きたいほど、感動しました。

主 ふむ、いい短篇だね。僕は読みそこなっていたが、いつかその本を貸してくれたまえ。しかし、君の話だけでも、大体は分かるね。ちよつと其処にある聖書をとつてくれないか。そのところを讀んでみよう。ルカ伝だったね。(聖書をひらいて讀む)「……やがて鶏鳴きぬ。主、ふりかえりてペテロに目をとめ給う。ここにペテロ、主の「今日にわとり鳴く前に、なんじ三度われを否まん」と言い給いし御言を憶いだし、外に出でて甚く泣けり。」 鶏が鳴くと、遠くからイエスが焚火にあたっているペテロの方をふりむいて見る、するとペテロは急にイエスに言われた言葉を思い出し、はつと我に返つて、庭の外へ出ていって、暗がりのなかではげしく泣き出すのだね。チェホフの短篇の話をきいて、こここのところを讀むと、なんだかこう一層、そのときのペテロの慟哭が身ぢかに感ぜられて来るようだな。

学生 僕はこの短篇を讀んだときにも思つたのですけれど、このペテロの話にしる、いつかお書きになつていたエマオの旅びとの話にしる、そんな縁遠いような物語がおもいがけず僕らの身ぢかに迫つて来て、妙に感動させられることがあるのですが、それに反して日本の古い物語はいかに美しく、なつかしいと思つても、それだけの強い力がないような気がするのです。何か fatal なものの前にわれわれを無氣力にさせてしまします。そのチェホフの短篇は、まづ、森のなかのもの寂しい自然の描写ではじまっています。チェホフの筆だと其処が非常に美しいんですが、そういうもの寂しい自然がすっかりその学生の心をめいらせているのです。そんなものからチェホフは小説を書きはじめていますが、日本のいいものはそ

れとは反対に、一番最後にそういうところへわれわれを引きずり込んでゆくように思われるんですけれど……。

主 確かにそういうところがあるだろう。これから君たちは大いにそういう fatal なものと戦ってみるのだね。僕なんぞも僕なりには戦ってきたつもりだ。だんだんそういう fatal なものに一種の詮め<sup>あきひ</sup>にちかい気もちも持ち出しているにはいるが。しかし、まだまだ 「#「足へん+宛」、第<sup>も</sup>3水第<sup>も</sup>3水曹<sup>も</sup>」けるだけ 「#「足へん+宛」、第<sup>も</sup>3水準<sup>も</sup>「-92-36」がいてみるよ。……（ばあっと夕日があたって来だしたのを見て、窓をあける。）毎日、こうして雪のなかの落日を眺めるのが愉<sup>たの</sup>しみだ。なんだか一日じゅう、冬の日ざしが明る過ぎて、室内にいても雪の反射でまぶしくって本も読めずに、ぼやぼやしながらその日も終ろうとする、 そんな空<sup>うつろ</sup>ろな気もちでいるときでも、この雪の野を赤あかと赫<sup>かが</sup>やかせながら山のかなたに落ちてゆくこうとしている日を眺めると、急に身も心もしまるような気がするのだ。君はいま、こういう落日をみながら、どんな文学的感情を喚<sup>よ</sup>び起<sup>おこ</sup>すかね？

学生 そうですね。僕には、いま、二つのものが浮びます。一つは釈迦空の「死者の書」を荘厳にいろどっていたあの落日の美しさです。それからもう一つは、フランシス・トムスンが「落日頌」（Ode to the setting sun）の中で歌った、あの野なかの十字架のうえを血で染めたように赫やかせながら没してゆく太陽の神々しさです。向うの山の端に、いま、くるめき入ろうとしているあの太陽は、「死者の書」に描かれてある、ああいった山越<sup>あみだぞう</sup>しの阿弥陀像めいても感ぜられ、それにもしいんとするような美しさを感じますが、それは何んといっても、やはり僕は、この雪の野のなかに、太

陽の最後の光をあびて血に染まったようになって悲痛に立っている  
一本の十字架を求めたいような気がします。

主 釈迦空と、フランス・トムスンか。なかなか重厚な好みだな。……僕はきのうね、こんな落日を眺めながら、ふいと飛驒ひだの山のなかの或る落日をおもい浮かべていた。もちろん、想像裡そつぞうじゆのものだがね。　「鷲の巢の楠の枯枝に日は入りぬ」どうだ、凄あはい……  
○ だろう。凡兆の句だよ。「越こしより飛驒へ行くとして籠かこの渡りのあやふきところどころ道もなき山路にさまよひて」という前書がある。そんな山のなかで、鷲の巢らしいものがかかっている、大きな楠の枯れ枯れになった枝を透いて日が真赤になってくるめき入る光景だろう。鷲の巢は見たことがない、しかし、楠の老木は嘗かつて見たことがある。上信国境にある牧場のまんなかにも、その大木がぽつんと一本だけ立っていた。その孤独な姿がいかにも印象的だった。そういう記憶があるせいかな、この凡兆の句にある楠も、僕には、そんな山のなかに他の木こむらからも離れて、ぽつんと一本だけ立っている老木のような気がする。

学生（目をつぶりながら）「鷲の巢の楠の枯枝に日は入りぬ」  
凄あはいなあ。

主 そんな句がみごとに浮ぶこともある。かとおもうと、随分くだらないことを思い出して、いつまでもひとりで感傷的な気分になっ  
ていることもある。或日などは、昔、村の雑貨店で買った十銭の雑記帳の表紙の絵をおもい浮べていた。雪のなかに半ば埋もれて夕  
日を浴びている一軒の山小屋と、その向うの夕焼けのした森と、そ  
れからわが家に帰ってゆく主人と犬と、　まあ、そういう絵は  
がきじみた紋切型の絵だ。或日、その雑記帳を買ってきて僕がなん



ということもなくその表紙の絵をスイスあたりの冬景色だろう位におもって見ていたら、宿の主人がそばから見て、それは軽井沢の絵ですね、とすこしも疑わずに言うので、しまいには僕まで、これはひょっとしたら軽井沢の何処かに、冬になって、すっかり雪に埋まってしまうと、これとそっくりな風景がひとりで出来あがるのかもしれない、と思い出したものだ。そうしたら急に、こんな絵はがきのような山小屋で、一冬、犬でも飼うて、暮らしたくなった。その夢はそれからやっと二三年立って実現された。その冬は、おもいがけず悲しい思い出になったが、それはともかくも、あの頃の立原などもまだ生きていて一しよに遊んでいた頃の僕たちときたら、まだ若々しく、そんな他愛のない夢にも自分の一生を賭けるようなことまでしかなかった。まあ、そういう時代のかたみのようなものだが、その十銭の雑記帳の表紙の絵を、僕はこういう落日を前にして、しみじみと思い浮べているようなこともあるしね。……だが、きょうは、君のおかげで、枯木林のなかの落日の光景がうかぶ。雪の面には木々の影がいくすじとなく異様に長ながと横わっている。それがこころもち紫がかったている。どこかで頬白がかすかに啼きながら枝移りしている。聞えるものはたったそれだけ（そのまま目をつぶる。）そのあたりには兎やら雉子やらのみだれた足跡がついている。そうしてそんな中に雑じって、一すじだけ、誰かの足跡が幽かについている。それは僕自身のだか、立原のだか……。

学生 急に寒くなってきましたね。もう窓をしめましようか。

底本：「昭和文学全集 第9巻」小学館

1988（昭和63）年6月1日初版第1刷発行

底本の親本：「堀辰雄全集 第3巻」筑摩書房

1977（昭和52）年11月30日初版第1刷発行

初出：「新潮」

1946（昭和46）年3月号

初収単行本：「堀辰雄作品集第六・花を持てる女」角川書店

1948（昭和23）年4月1日

筑摩書房の全集版の底本は角川書店版による。

初出情報は、「堀辰雄全集 第3巻」筑摩書房、1977（昭和52）

年11月30日、解題による。

入力：kompass

校正：門田裕志

2004年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。